

京都大学	博士（教育学）	氏名	山本 一成
論文題目	保育環境における意味と価値の探求 —保育実践へのエコロジカル・アプローチ—		
（論文内容の要旨） 本論文は、エコロジカル・アプローチによって、保育環境における意味と価値の探求の在り方を解明することで、保育実践のための環境研究のあるべき姿を提示しようとしたものである。本論文は、第Ⅰ部「生きられた環境の保育実践研究の必要性」、第Ⅱ部「エコロジカル・アプローチに基づく生きられた環境の保育実践研究論」、第Ⅲ部「生きられた環境の記述的保育実践研究」の3部から構成されている。 第Ⅰ部の第1章では、本論文の中心概念である「環境」概念が現在の環境概念へと展開する過程について、保育研究という観点から代表的な環境概念の思想家が選択され学説史として論じられる。ダーウィンの進化論に基づく環境論からはじまり、人間学や人間存在論に大きな影響を与えたユクスキュルの環境論、そしてその環境論を哲学的人間学の観点から展開したシェーラーの世界開放性の理論、さらにデューイの有機体と環境との相互作用として捉える経験理論などを綿密に解釈しながら、現在の保育思想・教育思想に大きな影響を与えた環境概念の基本的な枠組みが詳細に検討される。そして第2章では、それをもとに保育環境研究としての学説史研究がなされる。日本における優れた保育環境研究として津守真の保育理論が示されると同時に問題点も指摘される。さらに第3章では、今日保育環境研究で最も有力な研究方法の一つである現象学的研究について論じられ、その研究のもつ問題点が指摘される。現象学的手法は、「他なるもの（他者）」をも主観による「意味付与」として捉えるが、そのことによって「他なるもの」の無限性に目をふさぐことが論難される。 第Ⅱ部第4章では、前章での現象学的研究の問題点を受けて、問題点を克服する研究方法として環境の無限性に関わったエコロジカル・アプローチが提示される。しかし、現象学は環境の「表情的記述」を、アフォーダンス理論は環境の「機能的記述」をなしており、たがいに実在の異なった側面を明らかにするものである。両者は対立するのではなくむしろ相補的な位置関係にあり、その両方を捉えることは保育実践研究として新たな意味があることが、デューイ理論を手がかりにプラグマティズムの原則にしたがって明らかにされる。そのうえで第5章ではエコロジカル・アプローチが詳細に論じられる。ジェームズそしてデューイの影響を受けたアフォーダンスの理論家リードの経験科学論が詳細に検討される。リードはアフォーダンス理論における環境の意味と価値の理論を、生態学的経験科学として動物に留まらず人間の諸事象にまで拡張して展開しているが、これをさらに教育学的に読み換え本論文の思想的中核部が構築されていく。さらに第6章では、リードのアフォーダンス理論が、ジェームズの実在論の系譜に立つパットナムの自然実在論で捉え直されることで、実在論としての意義が明確にされ、現象学とは異なる「環境の未だ気づかれていない意味と価値を探求」する保育環境のアフォーダンス論として論じられる。 第Ⅲ部では著者が実際に経験した具体的な保育事例の記述をもとに、その事例を解釈しさらなる保育実践の可能性を示す形で保育環境研究がなされる。第7章では「人的環境」が論じられる。人もまた環境の一つとして意味と価値をもつと捉えることで、保育の在り方がどのように変容するかが明らかにされる。第8章では「物的環境」が論じられる。ここでは物を介した子どもと保育者とのやりとりの記述を例に、新たな環境との出会いがどのように生起し、そのことによって保育がどのような展開を見せるかが論じられる。第9章では「自然や社会の事象」が論じられるが、「気づかれていない命」という副題の通り、環境のなかに潜在しているだけで気づかれていなかった			

命に出会う経験の重要性が論じられる。この章の終わりでは、これまでの本論文の展開を踏まえて、改めて保育実践研究にたいしてエコロジカル・アプローチのもつ射程とその限界とが明解にまとめられる。さらに終章では、これまでの本論の議論を踏まえて、エコロジカル・アプローチに基づいて、「出会われていない環境」との新たな出会いによって、子どもとともに保育者に自己変容が生起することが明らかにされ、保育という営みが子どもと保育者による終わりなき環境探求のプロセスであることが論じられる。

(論文審査の結果の要旨)

従来の保育理論では、「環境」は保育者が子どもを教育するための手段・方法として論じられるか、あるいは子どもが経験する内容として論じられるかであった。著者はそれにたいして、保育環境とは、保育の現場の保育者と子どもによって生きられた経験としての環境であるとし、保育者 - 環境 - 子どもという一連の系のなかで、保育環境の「意味」や「価値」がその実在を確証されていくものでなければならないとする。そのため、保育環境の記述は保育者による「生きられた環境」経験の一人称による記述として出発しながらも、この経験の言語化によって研究者・保育者集団による協同の探求へと開き、保育の理論構築と新たな実践を導いていかなければならないとする。

本研究の優れたところは、アフォーダンス理論を継承し発展させたエドワード・リードの生態学的経験科学を、プラグマティズムを手がかりに教育学的に再構成し、その理論をもとに従来の保育学における環境研究を、エコロジカル・アプローチという新たな手法でもって変革しようと試みたところにある。詳しく述べると、①エコロジカル・アプローチによる記述によって経験の共通地盤を見出していくことで、他の研究者・保育者との環境理解と子ども理解の協同の探求を可能にし、保育実践・保育経験研究の可能性を開いたこと、また②同じく生きられた経験の記述を課題とする現象学の記述が環境の表情的側面を描きだすものであるのにたいして、エコロジカル・アプローチの記述は環境の機能的側面を描きだすものであるとし、保育実践研究においてエコロジカル・アプローチを現象学的研究と相補的な関係をもつと位置づけることで、二つのアプローチの教育学的意义と限界とを明らかにしたことである。

さらに重要なのは、「生きられた環境」を条件づける意味や価値が、現象学のように主観による意味付与によって構成されるものとしてではなく、未だ「出会われていない環境」(他なるもの=他者)をも隠しもつ、相互作用によって無限のアスペクトが生起しうる実在によるものと捉えることで、新たな保育環境論を提示したことである。予期していなかった「他なるもの」としての環境との出会いが、子どもと保育者とを深く変容させる出来事になる。このような「出会われていない環境」をも含みうる環境記述の手法として、エコロジカル・アプローチが保育実践研究においてもつ意味を明らかにした。本研究において、環境記述の手法を保育実践の文脈での環境の再解釈を可能とし保育者が子どもの理解を更新していくことのできる生きた道具へと鍛え直したこと、また保育実践自体の意味を子どもと保育者による新たな環境への終わりのない協同探求として捉える道を開いたことの意義は極めて大きい。

さらに付け加えるなら、エコロジカル・アプローチをこれまでの環境概念との対比によって深めるプロセスにおいて、保育における環境概念の学説史をダーウィンやユクスキュルの動物学に遡ることで、これまでにない広い視野から問い直して新たに論じたことは学説史研究としても高く評価できる。この学説史の検討作業が、著者が展開する保育実践研究における保育環境研究の射程を大きく深いものにすることに貢献している。

以上述べたように、本研究は、保育における環境の意味と価値とを論じ、保育環境概念の革新を果たそうとした優れた保育研究論文として高く評価することができる。試問において、現象学とアフォーダンス理論との対比の仕方や実在概念の規定の仕方にさらなる精度が必要なことなどが課題として指摘されたが、これらの課題の指摘は、本論文の主題のさらなる発展に向けての指摘であり、本論文の価値をいささかも下げたものではない。

よって、本論文は博士(教育学)の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年6月15日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、(期間未定) 当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日： 年 月 日以降